

Kokoro – Sensei’s Testament – Parts 19-27 (Natsume Sōseki)

じゅうく
十九

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私はこのKと小供の時からの中好でした。小供の時からといえば断らないでも解っているでしょう、二人には同郷の縁故があったのです。Kは真宗の坊さんの子でした。もっとも長男ではありません、次男でした。それである医者^{いしや}の所^{ところ}へ養子^{ようし}にやられたのです。私の生れた地方は大変本願寺派の勢力の強い所^{いしや}でしたから、真宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が良かったようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子^{おんな}がいて、その女の子が年頃^{としごろ}になったとすると、檀家^{だんか}のものが相談^{そうだん}して、どこか適当な所^{てきとう}へ嫁^{よめ}にやってくれます。無論費用^{むろんひよう}は坊さんの懐^{ふところ}から出るのではありません。そんな訳^{わけ}で真宗寺は大抵有福^{たいていゆうふく}でした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があったかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まったものかどうか、そこも私には分かりません。とにかくKは医者^{うち}の家へ養子^いに行つたのです。それは私たちがまだ中学^{ちゅうがく}にいる時の事^{こと}でした。私は教場^{きょうじょう}で先生^{せんせい}が名簿^{めいぼ}を呼ぶ時に、Kの姓^{せい}が急に^{きゅう}変わっていたので驚いたのを今でも記憶^{きおく}しています。

Kの養子^{さき}先もかなりな財産家^{ざいさんか}でした。Kはそこから学資^{がくし}を貰^{もら}って東京へ出て来たのです。出て来たのは私といっしょでなかったけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿^{おなじしゆく}に入りました。その時分は一つ室^{むろ}によく二人も三人も机^{つくえ}を並べて寝起^{ねお}きしたものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山^まで生捕^{やま}られた動物^{いけど}が、檻^{どうぶつ}の中で抱き合^{おり}いながら、外^{なか}を覗^だめるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人^{ひと}を畏^{おそ}れました。それでいて六畳^{ろくじょう}の間^まの中では、天下^{てんか}を睥睨^{へいげい}するような事をいっていたのです。

しかし我々は真面目^{まじめ}でした。我々は實際^{じっさい}偉^{えい}くなるつもりでいたのです。ことにKは強^{つよ}かったのです。寺^{てら}に生れた彼^{かれ}は、常に精進^{しやうじん}という言葉^{ことば}を使^{つか}いました。そうして彼の行為^{こうい}動作^{どうさ}は悉くこの精進^{しやうじん}の一語^{いちご}で形容^{けいよう}されるように、私には見^みえたのです。私は心^{こころ}のうちに常にKを畏敬^{いけい}していました。

ちゅうがく ころ しゅうきょう てつがく もんだい わたくし こま
Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせまし
た。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な
たてもものぞく くうき えいきょう わか ふつう ぼう はる
建物に属する空気の影響なのか、解りません。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遙かに
せいかく み う がんらい ようか いしゃ
坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家では彼を医者にするつも
りて東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもって、東京へ出
てきたのです。私は彼に向って、それでは養父母を欺くと同じ事ではないかと詰りました。
だいたん こた みち ことば かま
大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をして構わないとい
うのです。その時彼の用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解っていなかったでしょう。
むろん とし わか ばくぜん たつ
私は無論解ったとはいえません。しかし年の若い私たちには、この漠然とした言葉が尊とく
ひび けだか こころもち しはい ほう うご ゆ
響いたのです。よし解らないにしても気高い心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こう
とする意気組に卑しいところの見えるはずはありません。私はKの説に賛成しました。私の
どうい ゆうりよく し いちず
同意がKにとってどのくらい有力であったか、それは私も知りません。一図な彼は、たとい
はんたい おも どお つらぬ ちが せつ
私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違いなからうとは察せられま
す。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、たしょう せきにん
多少の責任ができてくるぐらいの事
こども しょうち かくご
は、子供ながら私はよく承知していたつもりです。よしその時にそれだけの覚悟がないにして
せいじん め か こ ふ かえ ひつよう おこ ばあい わ あ
も、成人した眼で、過去を振り返る必要が起った場合には、私に割り当てられただけの責任
お しとう ごき
は、私の方で帯びるのが至当になるくらいな語気で私は賛成したのです。

にじゅう
二十

わたくし おな か にゅうがく す かお ようか おく かね
「Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をして、養家から送ってくれる金
で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うもの
かという度胸とが、ふた こころ み しかた
二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは
へいき
私よりも平気でした。

さいしょ なつやす くに かえ こまごめ てら ひとま か べんきょう
最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のある寺の一間を借りて勉強するのだと
いってました。私が帰って来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして大観音の傍の汚
かえ き くがつじょうじゅん かれ おおがんのん そば きたな
い寺の中に閉じ籠っていました。彼の座敷は本堂のすぐ傍の狭い室でしたが、彼はそこで自
分のおも とお よろこ とき せいかつ
分の思う通りに勉強ができたのを喜んでいられるらしく見えました。私はその時彼の生活の
だんだんぼう ゆ みと おも てくび じゅうず か
段々坊さんらしくなっていくのを認めたように思います。彼は手頸に珠数を懸けていまし

た。私がそれは何のためだと尋ねたら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似をして見せました。彼はこうして日に何遍も珠数の輪を勘定するらしかったのです。ただしその意味は私には解りません。円い輪になっているものを一粒ずつ数えてゆけば、どこまで数えていっても終局はありません。Kはどんな所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしょう。詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでにお経の名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、基督教については、問われた事も答えられた例もなかったのですから、ちょっと驚きました。私はその理由を訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はないといいました。これほど人の有難がる書物なら読んでみるのが当たり前だろうともいいました。その上彼は機会があったら、『コーラン』も読んでみるつもりだともいいました。彼はモハメッドと剣という言葉に大なる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰っても専門の事は何にもいわなかったものとみえます。家でもまたそこに気が付かなかったのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だの、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なものです。我々に何でもない事が一向外部へは通じていません。我々はまた比較的内部的な空気ばかり吸っているのです。校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っているはずだと思い過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、私より世間を知っていたので、澄ました顔でまた戻って来ました。国を立つ時は私もいっしょでしたから、汽車へ乗るや否やすぐどうだったとKに聞きました。Kはどうでもなかったと答えたのです。

三度目の夏はちょうど私が永久に父母の墳墓の地を去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰って何をやるのだというのです。彼はまた踏み留まって勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとって、いかに波瀾に富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱と孤独の淋しさを一つ胸に抱いて、九月に入ってまたKに逢いました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼は私の知らないうちに、養家先へ手紙を出して、こっちから自分の詐りを白状してしまっただけです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。

いまさら まえ す ほか みち むこ
今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外に途はあるまいと、向うにいわせるつ
もりもあったのでしょうか。とにかく大学へ入ってまでも養父母を欺き通す気はなかったら
しいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れません。

にじゅういち
二十一

てがみ み ようふ たいへんおこ おや だま ふらち がくし おく こと
「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すような不埒なものに学資を送る事はでき
ないという厳しい返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せました。Kはまたそれと
ぜんご じっか う と しょかん まえ おと きっせき
前後して実家から受け取った書翰も見せました。これにも前に劣らないほど厳しい詰責の
ことば ことば ようかさき たい す ぎり くわ
言葉がありました。養家先へ対して済まないという義理が加わっているからでもありましょ
うが、こっちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまう
か、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題とし
て、差し当りどうかしなければならないのは、月々に必要な学資でした。

てん なに かんが たず やがっこう きょうし
私はその点についてKに何か考 えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつも
りだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内 職
の口はあなたが考えるほど払底でもなかったのです。私はKがそれで充 分 やって行けるだろ
うと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背いて、自分の行きた
い道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといって手を 拱 いでいる訳にゆ
きません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一も二もなくそれ
は つ かれ せいかく じかつ ほう ともだち ほご もと た はるか ところ
を跳ね付けました。彼の性格からいって、自活の方が友達の保護の下に立つより 遥 に快よ
く思われたのでしょうか。彼は大学へはいった以上、自分一人ぐらいどうかできなければ 男 で
ないような事をいいました。私は私の責任を 完 う するために、Kの感 情 を傷つけるに忍び
ませんでした。それで彼の思 う 通りにさせて、私は手を引きました。

のぞ さが だ じかん お
Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとって、この
しごと つら そうぞう べんきょう
仕事がどのくらい辛かったかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り 勉 強 の手をちっ
とも緩めずに、あた 新 に しょ もうしん けんこう きづか
とも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし
ごうき わら すこ ちゅうい と あ
剛気な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

どうじ かれ ようか かんけい だんだん がら き じかん よゆう まえ
同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がって来ました。時間に余裕のなくなった彼は、前
のように わたくし はな きかい うば
私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末を詳しく聞かずにしまいましたが、
かいけつ かいけつ こんなん こと しょうち ひと なか はい ちょうてい
解決のますます困難になってゆく事だけは承知していました。人が仲に入って調停
を 試 みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促したのですが、Kは到底駄目
だといって、応じませんでした。この剛情なところが、——Kは学年中 で帰れないのだから
しかた しょうじょう かくねんじゅう かい
仕方がないといいましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます
けんあく けんあく かんじょう がい とも じっか いか か
険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感情を害すると共に、実家の怒りも買うよう
になりました。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた時は、もう何の効果もあ
りませんでした。私の手紙は一言の返事さえ受けずに葬られてしまったのです。私も腹が立ちま
した。今までも行掛り上、Kに同情していた私は、それ以後は理否を度外にもKの
みかた き
味方をする気になりました。

さいご さいご ふうせき けつ だ がくし べんしょう
最後にKはどうとう復籍に決しました。養家から出してもらった学資は、実家で弁償する事
になったのです。その代り実家の方でも構わないから、これからは勝手にしろというのです。
むかし ことば かんどう つよ し
昔の言葉でいえば、まあ勘当なのでしょう。あるいはそれほど強いものでなかったかも知
れませんが、とうにん かいしゃく には はは おとこ せいかく いちめん
当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、
たしかに けいぼ そだ けっか じつ い
たしかに継母に育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていた
ら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔たりができずに済んだかも知れないと私は思
うのです。彼の父はいうまでもなく僧侶でした。けれども義理堅い点において、むしろ武士に
に 似たところがありはしないかと 疑 われます。

にじゅうに
二十二

「Kの事件が一段落ついた後で、私 は彼の姉の夫 から長い封書を受け取りました。Kの
ようし い さき ひと しんるい あた しゅうせん とき ふうせき
養子に行った先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させ
た時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

てがみ 手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているか
ら、なるべく早く返事を貰いたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣いだ兄よ
りも、他家へ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟ですけ

れども、この姉とKとの間には大分年齒の差があつたのです。それでKの小供の時分には、
ままはは ほう ほんとう はは み
継母よりもこの姉の方が、かえって本当の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から
おな いみ しょじょう に さんどき こと う あ
同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。Kはそのたびに心配する
におよ ことた うんわる せいかつ よゆう いえ かたづ
に及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたた
めに、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてやる訳にも行かなかつたので
す。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛で出しました。その中に、万一の場合には私がどうでも
するから、安心するやうにという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固より私の
いちぞん ゆくさき あた こうい むろんふく
一存でした。Kの行先を心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていまし
たが、私を軽蔑したとより外に取りやうのない彼の実家や養家に対する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になるまで、約一年半の間、
かれ どくりよく おの ささき にかど ろうりよく しだい けんこう
彼は独力で己れを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と
せいしん うえ えいきょう き み だ むろんようか で で うるさ
精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅い
もんだい てつだ だんだんセンチメンタル じぶん
問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷的になって来たのです。時によると、自分だけ
が世の中の不幸を一人で背負って立っているやうな事をいいます。そうしてそれを打ち消せば
すぐ激するのです。それから自分の未来に横たわる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くよ
うにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつ
て、あたたび のぼ つね いちねん た にねん す そつぎよう まちか
新しい旅に上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、
きゅう あし はこ のろ き つ かはん しつぼう あた まえ
急に自分の足の運びの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になってい
ますから、Kの場合も同じなのですが、彼の焦慮り方はまた普通に比べると遥かに甚しか
つたのです。私 はついに彼の気分を落ち付けるのが専一だと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せといひました。そうして当分身体を楽にして、
あそ ほう おお しょうらい とくさく ちゆうこく ごうじょう ようい
遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情なKの事ですから、容易に私
のいう事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、實際いい出して見ると、思ったよ
りも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張す
るのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだといふのです。それにはなる

べく窮屈な境遇にいたくなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、まるで酔興です。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちっとも強くなっていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹っているくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向って至極同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向って、人生を進むつもりだったとついには明言しました。（もっともこれは私に取ってまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから）。最後に私はKと一しょに住んで、一しょに向上の路を辿って行きたいと発議しました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪く事をあえてしたのです。そうして漸との事で彼を私の家に連れて来ました。

にじゅうさん
二十三

「私の座敷には控えの間というような四畳が付属していました。玄関を上がって私のいる所へ通ろうとするには、ぜひこの四畳を横切らなければならないのだから、実用の点から見ると、至極不便な室でした。私はここへKを入れたのです。もっとも最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだったのですが、Kは狭苦しくっても一人でいる方が好いと言って、自分でそっちのほうを択んだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置に対して始めは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止した方が好いというのです。私が決して世話の焼ける人でないから構うまいという、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。それでは今厄介になっている私だって同じ事ではないかと詰ると、私の気心は初めからよく分っていると弁解して已まないのです。私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更えます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止めといい直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だって強いてKと一しょにいる必要はなかったのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきっとそれを受け取る時に躊躇するだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅へ置いて、二人前

の食料しょくりょうを彼の知らない間まにそっと奥さんおくさんの手に渡わたそうとしたのです。しかし私はKの経済けいぎ問題もんだいについて、一言も奥さんおくさんに打ち明ける気はありませんでした。

私わたくしはただKの健康けんこうについて云々うんぬんしました。一人で置くとますます人間にんげんが偏屈へんくつになるばかりだからといいました。それに付け足して、Kが養家ようかと折合おりあいの悪わるかった事ことや、実家じっかと離れてしまった事はなや、色々いろいろ話して聞かせました。私は溺れかかった人を抱いて、自分の熱ねつを向うに移うつしてやる覚悟かくごで、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたかい面倒めんどうを見てやってくれと、奥さんおくさんにもお嬢さんじょうさんにも頼たのみました。私はここまで来て漸々き奥さんおくさんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末てんまつをまるで知らずにいました。私もかえってそれを満足まんぞくに思おもって、のっそり引ひき移うつって来たKを、知らん顔しで迎むかえました。

奥さんとお嬢さんじょうさんは、親切しんせつに彼の荷物にもつを片付かたづける世話せわや何かなにをしてくれました。すべてそれを私わたくしに対する好意こういから来たのだと解釈かいしゃくした私は、心こころのうちに喜よろこびました。――Kが相変あいかわらずむっちりした様子ようすをしているにもかかわらず。

私がKに向むかって新あたらしい住居すまいの心持こころもちはどうだと聞いた時ときに、彼はただ一言いちげん悪くないといっただけでした。私からいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今いままでいた所ところは北向きたむきの湿しめっぽい臭においのする汚きたない室へやでした。食物くいものも室相応そうおうに粗末そまつでした。私わたくしの家うちへ引ひき移うつった彼は、幽谷ゆうこくから喬木きょうぼくに移おもむきった趣おもしろがあつたくらいです。それをさほどに思けしきう気色けしきを見せないのは、一つは彼の強情ごうじょうから来ているのですが、一つは彼の主張しゅちょうから出ているのです。仏教ぶつぎょうの教義きょうぎで養やしなわれた彼は、衣食住いしょくじゅうについてとかくの贅沢ぜいたくをいうのをあたかも不道德ふどうとくのように考かんがえていました。なまじい昔むかしの高僧こうそうだとか聖徒せいとだとかの伝でんを読よんだ彼かれには、ややともすると精神せいしんと肉体にくたいとを切り離きしたがる癖くせがありました。肉にくを鞭撻べんたつすれば霊れいの光輝こうきが増ますように感かんぜずる場合ばあいさえあつたのかも知しれません。

私はなるべく彼かれに逆さからわない方針ほうしんを取りました。私は氷こおりを日向ひなたへ出だして溶とかす工夫くふうをしたのです。今いまに融とけて温あたたかい水みずになれば、自分で自分に気きが付つきく時機じきが来くるに違ちがいないと思ったのです。

「私^{わたくし}は奥さん^{おく}からそういう風^{ふう}に取り扱^とわれた結果^{あつか}、段々^{けっか}快活^{だんだん}になって来た^{かいかつ}のです。それを自覚^きしていたから、同じもの^{じかく}を今度はK^{おな}の上^{こんど}に応用^{うえ}しようと試^{おうよう}みた^{ところ}のです。Kと私とが性格^{せいかく}の上^{だいぶ}において、大分^{だいぶ}相違^{そうい}のある事^{こと}は、長^{なが}く交際^{つきあ}って来た私^きによくわか^{わか}っていましたが、私の神経^{しんけい}がこの家庭^{かてい}に入^{はい}ってから多少^{たしょう}角^{かど}が取^とれたごとく、Kの心^{こころ}もここに置^おけばいつか沈^{しず}まる事^{かんが}があるだろうと考^{かんが}えた^{かんが}のです。

Kは私^{つよ}より強^{けっしん}い決心^{ゆう}を有^{おとこ}している男^{べんきょう}でした。勉^{ばい}強^{ばい}も私の倍^{ばい}ぐら^{ばい}いはした^{ばい}でしょう。その上^も持^{うま}って生^{あたま}れた頭^{たち}の質^{あつ}が私^{あつ}よりもず^{あつ}っとよ^{あつ}かった^{あつ}のです。後^{あと}では専^{せん}門^{もん}が違^{ちが}いましたから何^{なん}ともい^{なん}えませ^{なん}んが、同^{おな}じ級^{きゅう}に在^{あいだ}る間^{ちゅうがく}は、中^{こうとう}学^{がっこう}でも高^{ほう}等^{つね}学^{じょう}校^{せき}でも、K^しの方が常^{じょう}に上^{じょう}席^{せき}を占^しめていま^しました。私^{へい}には平^{へい}生^{ぜい}から何^{なん}をしてもK^{およ}に及^{およ}ばないとい^{じかく}う自^{じかく}覚^{じかく}があ^{じかく}った^{じかく}くらいです。けれども私^しが強^{うち}いてK^ひを私^ばの宅^きへ引^{とき}っ張^{とき}って来^{とき}た時^{とき}には、私^しの方がよ^しく事^じ理^りを弁^{わきま}えていま^{しん}す。私^{しん}にいわせると、彼^{かれ}は我^が慢^{まん}と忍^{にん}耐^{たい}の区^く別^{べつ}を了^{りょう}解^{かい}してい^{おも}ないよう^{おも}に思^{おも}われた^{おも}のです。これ^きはとく^{くだ}にあ^{にく}なた^{にく}のため^{にく}に付^{にく}け足^{にく}してお^{にく}きたい^{にく}の^{にく}のですから聞^きいて下^{くだ}さい。肉^{にく}体^{たい}なり精^{せい}神^{しん}なりすべ^{せい}て我^{われ}々^{われ}の能^{のう}力^{りょく}は、外^{がい}部^ぶの刺^し戟^{げき}で、発^{はつ}達^{たつ}もす^{はかい}るし、破^は壊^{かい}され^{はかい}るもす^{はかい}るでし^{はかい}ょうが、ど^{ひつ}っち^{よう}に^{ひつ}しても刺^{むろん}戟^{むろん}を段^{むろん}々^{むろん}に強^{むろん}くする必^{むろん}要^{むろん}のある^{むろん}のは無^{むろん}論^{むろん}です^{むろん}から、よ^{むろん}く考^{むろん}えな^{むろん}いと、非^ひ常^{じょう}に陰^{けん}悪^{あく}な方^{ほう}向^{こう}へむ^すいて進^{すす}んで行^ゆきな^ゆがら、自^じ分^{ぶん}はも^はちろ^はん傍^{ばう}のもの^はも気^きが付^つかず^つに在^つる恐^{おそ}れ^{しょう}が生^いじ^{しゃ}てき^{せつ}ます。医^い者^{しゃ}の説^{せつ}明^{めい}を聞^{にん}くと、人^{にん}間^{げん}の胃^い袋^{ぶくろ}ほ^おう横^{ちやく}着^{ちやく}な^{ちやく}もの^{ちやく}はな^{ちやく}い^{ちやく}そう^{ちやく}です。粥^{かゆ}ばかり食^くっていま^いると、それ^い以上^{じょう}の堅^{かた}いもの^こを消^こ化^ちす力^{ちから}がいつ^まの間^まにか^まなくな^まってしま^まうのだ^まそう^まです。だ^まから何^までも食^まう稽^{しだ}古^{だい}を^ましてお^まけと医^し者^たはい^しうの^たです。け^えれ^えどもこ^えれはた^えだ^え慣^えれる^えとい^えう意^え味^えでは^えな^えか^えら^えう^えと思^えいま^えす。次^{えい}第^{よう}に刺^{えい}戟^きを増^{えい}すに^{えい}従^{えい}つて、次^{えい}第^きに營^{えい}養^{よう}機^き能^{のう}の^{えい}抵^{えい}抗^き力^{りょく}が強^{えい}くなる^{えい}とい^{えい}う意^{えい}味^{えい}で^{えい}なく^{えい}て^{えい}は^{えい}なり^{えい}ます^{えい}まい。も^{えい}し反^{えい}対^{たい}に胃^いの力^{ちから}の方が^{えい}じり^{えい}じり^{えい}弱^{えい}って^{えい}行^{えい}った^{えい}なら^{えい}結^{えい}果^{くわ}は^{えい}どう^{えい}なる^{えい}だ^{えい}ら^{えい}うと^{えい}想^{えい}像^{ざう}して^{えい}み^{えい}れば^{えい}す^{えい}ぐ^{えい}解^{えい}る^{えい}事^{えい}です。K^{えい}は私^{えい}より^{えい}偉^{えい}大^{たい}な^{えい}男^{なん}で^{えい}した^{えい}け^{えい}れ^{えい}ども、^{えい}全^{ぜん}く^{えい}こ^{えい}こ^{えい}に気^きが^{えい}付^{えい}いて^{えい}い^{えい}な^{えい}か^{えい}つ^{えい}た^{えい}の^{えい}です。た^{えい}だ^{えい}困^{こん}難^{なん}に^{えい}慣^{えい}れて^{えい}しま^{えい}え^{えい}ば、^{えい}し^{えい}まい^{えい}に^{えい}そ^{えい}の^{えい}困^{こん}難^{なん}は^{えい}何^{なん}でも^{えい}な^{えい}く^{えい}なる^{えい}もの^{えい}のだ^{えい}と^{えい}極^きめ^{えい}て^{えい}いた^{えい}ら^{えい}しい^{えい}の^{えい}です。艱^{かん}苦^くを^{えい}繰^くり^{えい}返^{かえ}せば、繰^{かん}り^く返^{かえ}す^{えい}とい^{かん}う^くだ^{かえ}け^{えい}の^{かん}功^く徳^{とく}で、そ^{えい}の^{えい}艱^{かん}苦^くが^{えい}気^きに^{えい}か^{えい}か^{えい}ら^{えい}な^{えい}く^{えい}なる^{えい}時^じ機^きに^{えい}避^めげ^{えい}る^{えい}もの^{えい}と^{えい}信^{しん}じ^き切^きつ^{えい}て^{えい}いた^{えい}ら^{えい}しい^{えい}の^{えい}です。

私^{わたくし}はK^とを説^{あき}くとき^{あき}に、ぜ^{あき}ひそ^{あき}こ^{あき}を明^{あき}ら^{あき}かに^{あき}して^{あき}や^{あき}り^{あき}た^{あき}か^{あき}つ^{あき}た^{あき}の^{あき}です。し^{あき}か^{あき}しい^{あき}え^{あき}ば^{あき}き^{あき}つ^{あき}と^{あき}反^{はん}抗^{こう}され^きる^きに^き極^きま^きって^きいま^きした^き。ま^むた^む昔^{かし}の^{ひと}人^{れい}の^{れい}例^{れい}な^ひど^ひを、引^ひ合^きに^ひ持^ひつ^ひて^ひ来^ひる^ひに^ひ違^{ちが}い^もない^もと思^{おも}いま^{おも}す。

いました。そうなれば私だって、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくな
ります。それを首肯してくれるようなKならいいのですけれども、彼の性質として、議論
がそこまでゆくと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通り
を、行為で実現しに掛ります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分
を破壊しつつ進みます。結果から見れば、彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大
なのに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡ではありませんでした。彼の気性をよ
く知った私はついに何ともいう事ができなかったのです。その上私から見ると、彼は前にも述
べた通り、多少神経衰弱に罹っていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたところ
で、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩をする事は恐れてはいませんでした
けれども、私が孤独の感に堪えなかった自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の
境遇に置くのは、私にとって忍びない事でした。一歩進んで、より孤独な境遇に突き落とすのは
なお厭でした。それで私は彼が宅へ引き移ってから、当分の間は批評がましい批評を彼
の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしました。

にじゅうご
二十五

「私は蔭へ廻って、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をするように頼みました。私
は彼のこれまで通ってきた無言生活が彼に崇まっているのだろうと信じたからです。使わない
鉄が腐るように、彼の心には錆が出ていたとしか、私には思われなかったのです。

奥さんは取り付き把のない人だといって笑っていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙
げて私に説明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうで
す。では持って来ようという、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけ
れども要らないんだといったぎり応対をしないのだそうです。私はただ苦笑している訳にも
ゆきません。気の毒だから、何とかいってその場を取り繕っておかなければ済まなくなりま
す。もっともそれは春の事ですから、強いて火にあたる必要もなかったのですが、これでは取
り付き把がないといわれるのも無理はないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になって、女二人とKとの連絡をはかるように力めまし
た。Kと私が話している所へ家の人を呼ぶとか、または家の人と私が一つ室に落ち合った所
へ、Kを引っ張り出すとか、どちらでもその場合に応じた方法をとって、彼らを接近させよ

うとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起って室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話をしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の中では、Kがそのために私を軽蔑していることがよく解りました。

私はある意味から見て実際彼の軽蔑に価値していたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遥かに高いところにあつたともいわれるでしょう。私もそれを否みはしません。しかし眼だけ高くて、外が釣り合わないのは手もなく不具です。私は何を措いても、この際彼を人間らしくするのが専一だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像で埋まっても、彼自身が偉くなってゆかない以上は、何の役にも立たないという事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝した上、錆び付きかかった彼の血液を新しくしようと試みたのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まって来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟ってゆくようでした。彼はある日私に向かって、女はそう軽蔑すべきものでないというような事をいいました。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していたらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われます。今までの彼は、性によって立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女を一様に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといいました。彼はもっともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になっている頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしょう。しかし裏面の消息は彼には一口も打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠っていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私にとって何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜びを感じずにはいられなかったのです。私は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思った通りを話しました。二人も満足の様子でした。

「Kと私 は同じ科におりながら、専攻の学問が違っていましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。私の方が早ければ、ただ彼の空室を通り抜けるだけですが、遅いと簡単な挨拶をして自分の部屋へはいるのを例にしていました。Kはいつもの眼を書物からはなして、襖を開ける私をちょっと見ます。そうしてきっと今帰ったのかといいます。私は何も答えないで點頭く事もありますし、あるいはただ「うん」と答えて行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神田に用があって、帰りがいつもよりずっと後れました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さんの声を聞いたのです。声は慥かにKの室から出たと思いました。玄関から真直に行けば、茶の間、お嬢さんの部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの室、私の室、という間取なのですから、どこで誰の声がしたくらは、久しく厄介になっている私にはよく分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已みました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数のかかる編上を穿いていたのですが、——私がごんでその靴紐を解いているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると、私の疝違かも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちゃんと坐っていました。Kは例の通り今帰ったかといいました。お嬢さんも「お帰り」と坐ったままで挨拶しました。私には気のせいかその簡単な挨拶が少し硬いように聞こえました。どこかで自然を踏み外しているような調子として、私の鼓膜に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。

奥さんははたして留守でした。下女も奥さんといっしょに出たのでした。だから家に残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私 はちょっと首を傾けました。今まで長い間世話になっていたけれども、奥さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅を空けた例はまだなかったのですから。私は何か急用でもできたのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だといえばそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不断の表情に帰りました。急用ではないが、ちょっ

と用があつて出たのだと真面目に答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙しました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰って来ました。やがて晩食の食卓でみんなが顔を合わせる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだだったので、食事のたびに下女が膳を運んで来てくれたのですが、それがいつの間にか崩れて、飯時には向うへ呼ばれて行く習慣になっていたのです。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極めました。その代り私は薄い板で造った足の畳み込める華奢な食卓を奥さんに寄附しました。今ではどこの宅でも使っているようですが、その頃そんなたくしゅういならくかぞく家族はほとんどなかったのです。私はわざわざおちゃみずかぐやいくふうどおつくあざ御茶の水の家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上げさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に肴屋が来なかったので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかったのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それももつともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱られてすぐ已めました。

にじゅうしち
二十七

「一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいっしょに話している室を通り抜けました。その時お嬢さんは私の顔を見るや否や笑い出しました。私はすぐ何がおかしいのかと聞けばよかったですでしょう。それをつい黙って自分の居間まで来てしまったのです。だからKもいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができなくなりました。お嬢さんはすぐ障子を開けて茶の間へ入ったようでした。

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だといいました。私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんが睨めるような眼をお嬢さんに向けるのに気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻ってまた富坂の下へ出ました。散歩としては短い方ではありましたが、その間に話した事は極めて少なかったのです。性質からいうと、Kは私よりも無口な男でした。私も

多弁な方ではなかったのです。しかし私は歩きながら、できるだけ話を彼に仕掛けてみました。私の問題はおもに二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかったのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見わけのつかないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得なくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見えました。もっともそれは二学年目の試験が目の前に逼っている頃でしたから、普通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だったのでしょうか。その上彼はシュエデンボルグがどうだとかこうだとかいって、無学な私を驚かせました。

我々が首尾よく試験を済ました時、二人とももう後一年だといって奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一の誇りとも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になっていたのです。Kは私に向って、女というものは何にも知らないで学校を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古している縫針だの琴だの活花だのを、まるで眼中に置いていないようでした。私は彼の迂闊を笑ってやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁もしませんでした。その代りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を軽蔑しているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢さんを、物の数とも思っていないらしかったからです。今から回顧すると、私のKに対する嫉妬は、その時にもう充分萌していたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振を見せました。無論彼は自分の自由意志でどこへも行ける身体ではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行っても差支えない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。家で書物を読んだ方が自分の勝手だというのです。私が避暑地へ行って涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行ったらよかろうというのです。しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなっていくのを見ているのが、余り好い心持ではなかったのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかといわれればそれまでです。私は馬鹿に違いないのです。果しのつかない二人の議論を見る

に見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はどうとういっしょに房州へ行く事になりました。